

アクセルワールド BLACK

リユーイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アクセルワールドに仮面ライダーBLACKRXの力を持って神様転生するお話です。

目次

プロローグ

第一話 転生

1

第二話 後悔を糧に誕生!! 仮面ライダーBLACKRX

5

第三話 仲間

13

プロローグ

第一話 転生

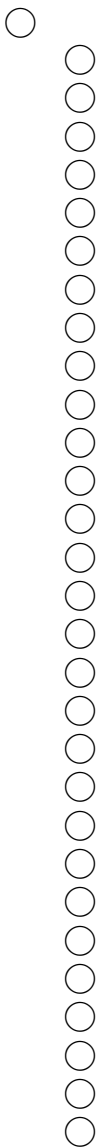
「RXキック!!」

俺は蜘蛛の意匠の怪人に両足で蹴りを放つ。空気との摩擦で赤熱した両足は寸分たがわずに蜘蛛怪人に吸い込まれるように決まる。蹴り倒された蜘蛛怪人はそのまま起き上がることなく断末魔を上げながら泡と消え行き跡形もなくなった。

そんな光景を眺めて俺はいつもと変わらない日常に少し辟易しため息をつき自分の愛車である命を持ったバイク、アクロバッターにまたがりその場を後にする

俺がなぜ仮面ライダーBLACK RXになり来る日も来る日も怪人退治に追われているのかを知るには俺が生まれる前まで遡らなくてはならない。

運命の瞬間、それは俺が転生を承諾した時だったのかもしれない。



此処は何処だ？ 目を覚ますと俺はあたりを見回す。すると上も下も右も左もないまるで雲一つない青空の真ん中にある様な気分になる不思議な空間にいることに気づいた。

「さて、ここがどこだか分からないが、こんな心地のいい空間なんだ、少しぐらい惰眠をむさぼっても許されるよな。」

誰に聞かせるでなく呟き、まどろんでいると、不躰に俺に話しかけてくる声が聞こえた。だが何故かその声に嫌な感じはせずしばし聞き入った。

「心地よいと言ってもらえて光栄です。しかしここは世界の理より完全に外れた場所あまり長い間留まって頂くわけにはまいりません。貴方は肉体や魂の軀より時はなたれ今この時、貴方と言う存在その

ままでこの場所にいます。私は貴方に頼みたい事がありここにお招きしました。どうか聞いていただけないでしょうか？」

空間全体から聞こえてくるようなその声の主に興味の沸いた俺は問いかけられたことの答えではなく名を聞いた。

「お前は一体何なんだ？ 名前は何という？」

俺の声は何にも反射することなくこの空間に溶けて行つたようだったがちやんと聞こえていたようで返事があつた。

「神、精霊、悪魔、かつて私を呼び表す言葉はあまた存在した。だがどれも私そのものを適切に表すものではなかつた。しかし今は簡単、私は乞い願うモノだ。」

気取つた物言いをする奴だなと思いつつも俺は願ひ事と言う物を聞いてみたくなり話の続きを話すように促す。

「それで俺に何を頼みたいんだ。持つて回つた言い方はやめてくれよ。」

「そうだな、有り体に言うると君は死んでいるんだ。そんな君にある世界に転生してもらいたいと思つてね。」

まったく、いくら持つて回つた言い方はやめろと言つたからつてやつてほしいことだけ言われても判断できないだろうが。

この辺りは自称乞い願うモノの融通の利かなさを見せられた感じで、今までに比べて少しは人間味を感じる。

「なんで俺を転生させたいんだ、理由を教えてくださいるか？」

「貴方は子供のころ理科授業なんかでミョウバンの再結晶実験なんかしませんでしたか？ ミョウバンを限界まで溶かした飽和水溶液に種結晶をつるしてつけておくと大きなミョウバンの結晶が析出するんですよ。ちなみにコツは再結晶化させている時にホコリなどの不純物が入らない様にしておくことです。不純物が入るとそれを核として結晶ができてしまうので種結晶の方も大きくなりくいんですよ。」

「突然理科の話なんかされても困るんだがな。」

「簡単に言つてしまえばあなたに転生してもらいたい世界で同じようなことを起こしたいと言う事です。その世界では悪意が過飽和

状態でいつ悪意の種ができ大きく成長するか分かりませんが、なので貴方と言う不純物を世界に入れて小さな悪意の結晶をいくつも固体として生み出し人自身の手で処理をしてもらおうと考えているのです。」

人の事を不純物だなんてよくも言ってくれる。だが今の説明が本当ならばその世界の人以外なら誰でもよかったと言う事か。

「俺にはそうそう戦う力なんてないんだが。」

「貴方が闘い悪意を消す必要はありませんよ。見えもせず触れもできないならともかく物質として存在するならば人の手でどうとでもするだろう。ですが早々あなたに死なれても事らとしても困りますし自衛の手段はお渡しします。お引き受けしていただけるでしょうか？」

話を聞いているとき俺は転生するのも面白いんじゃないかと思っってしまった。少しでもそう感じてしまえばすでに奴の術中にはまってしまったと言う事なのだろう、俺は新しい世界への興味が止まらなくなり、

「いいぜ!! 引き受ける。」

と返事をしてしまっていた。

「ならさっそく転生の準備をしよう、心の中に君が最も強いと思うヒーロー像を強く思い浮かべてくれ。」

声に従い俺は大好きな仮面ライダーたちの事を、特に仮面ライダーBLACK RXを思い浮かべる。すると何故か体の内から自分が変わっていく妙な感覚が湧き上がってきた。

「これは一体俺の体はどうなったんだ。」

「貴方の存在は今貴方が強く思い浮かべたものに近づきました。必要なものは転生されてから手に入る様にしておきます。あとついでと言っては何ですが貴方が転生する世界ではあなたが生まれた数年後ブレインバーストと言うVR対戦格闘ゲームが開発されるのが戦いの経験のない貴方が経験を積むにはもってこいなのでそちらも送らせていただきます。それでは良い来世を。」

なんだか急かしている様なその言葉に不信を感じる間もなく俺の

意識は闇に沈んでいった。

を楽しんでいた。

今日は少し遠くにある自然公園に向かつて一人で歩いていた。弟も来たがったがさすがに5歳児には遠かったので弟はうちと同じマンションに住む弟と同じ年の幼なじみの男の子と女の子と一緒に家に家で遊んでいるように言い含めてきた。

俺はナビの示すとおりに横断歩道を渡り右折して暫く進んでいくと目的地が近いとナビのアナウンスが聞こえた。

自然公園に着くとそこでは親子連れや連れだつて遊びに来たのであろう小学生などが思い思いに楽しい時間を過ごしていた。それを見て弟たちも連れてきてもよかったかもしれないなとしばし公園の入口でそんなことを考えていたがこんな所でじつとしていても周りの迷惑になるだけだなと思ひ至り自然公園に入つていった。

自然公園の中は人に閉塞感を与えるような雑多な人工物だらけのコンクリートジャングルな街中とは打って変わって綺麗な花や植物などにあふれて人を癒している。だがそんな自然も人が意図的に保護し残し育てているのだから、どこまで本当の自然か分からないな、なんて自分でも少しひねくれた考えだなと思ひ居ながら、視界に映されたARの草花の説明分を読みつつ周りを眺めていた。

そんな時一人の少女が視界に入った。彼女は今の俺と同じ年頃で友達を追いかけている様だった。

彼女の亜麻色の長い髪が天使の羽の様に汚れ一つない真っ白なワンピースにかかる様は、まるで塩の大地に流れる川が太陽の輝きを写し取っているみたいに美しく、年甲斐もなく俺の瞳は彼女を追い続けた。

彼女が友人であろう子供と楽しそうに遊ぶさまを見て、俺は先ほどまで考えていた『ここが本当の自然か人工の偽りの自然か』なんて些細なことで大切なこと、それはここに来た人が幸福な時間を過ごすこともできる場所だと言う事なのだろうと思ひ至った。

俺はそんな風に考えるきっかけをくれた少女に心の中で礼を言い、その場を後にし、また暫く自然公園を見て回る。

歩き回り少し疲れた俺は公園の中ほどにいくつか設置されている

ベンチに腰掛けて体を休めていると公園の奥の方が何やら騒がしくなってきた。やがて公園の奥から何かに追い立てられるように逃げ出す人々が俺の目の前を次々と過ぎ去っていく。そんな人の一人を捕まえ、何が起きているのか問うと「怪人が出た!!」と言ってすぐに逃げて行った。

俺はすぐにそれが俺に転生するように言った奴が言っていた悪意の結晶であることに気づき逃げようと公園の入口に向かおうとするが無駄に良い強化された聴力の所為で大勢の悲鳴が聞こえる。

その悲鳴に何もしないのは罪悪感を覚えたが怪人に立ち向かうほどの勇気は俺にはない、そしてほつても置いて自分は関係ないと無関心を決め込めるほど凶太い神経はしていなかった。そんな気持ちのせめぎ合いの結果、近くに行き様子を窺うことにした。

物陰に隠れ怪人のもとに向かい様子を窺うとそこには片腕が鞭になっっているガラガラヘビの怪人、仮面ライダー一号を苦しめた地獄大使の正体としても有名なガラガラランダがいた。

地獄大使だ!! いくらなんでも最初から大物すぎるだろう!! 誰に聞かせるわけでもなく心の中で悪態をつきガラランダがやってきた方を見るとたくさんの人が倒れている様だったが息のある人もいた。

ガラランダが何かを探すようにあたりを見回す、何かを見つけたのかベンチのある方へ歩いて行き、到着するとベンチをその鞭の様になっっている腕でベンチを弾き飛ばす。するとそこには先ほど見かけた亜麻色の長い髪の少女が逃げ遅れたのだろう小さくうずくまっていた。

ガラランダは少女周りに鞭を振り下ろし少女が怖がるのをただ楽しんでる様でまるで地獄大使の様な知性を感じず、悪意に促されるままに行動している様だった。

少女は怯えながらもなんとか逃げようと立ち上がり走り出す。

ガラランダはそれを待っていたと言わんばかりに鞭を振り上げる。

俺はもう見ていられず、思わずガラランダへと駆け出した。

少女が襲われている様子はテレビやネットでみる犯罪や事故のニュースと違いとてつもなくリアルで、家族でも友人でもない、名前すら知らない少女、だけどその身に起きようとしていることがどうしても許せなかった。

「ただ俺は勇気を出すのが遅すぎた。」

「止めろおーおー」俺は声の限り下げぶ。

しかしガラガラランダの鞭は俺の行動を待つわけはなく少女の足に振り下ろされる。

鞭が命中した少女の両足の膝から下ははじけ飛び、少女自身も鞭の攻撃の余波でやすやすと吹き飛ばされた。

甲高い悲鳴が辺りに響やがて何も聞こえなくなった

少女が余の痛みに気絶したのだ。

俺の所為だ。俺がもつと早く戦う決意を決めていれば!!

だけど今ここで足を止めるわけにはいかなかった。少女を助けるためにもこれ以上犠牲を出さない為にも。

俺は走りながら己の力を解き放った。

俺は光に包まれ次の瞬間には変身できていた。

その姿はダークグリーンと黒い生態装甲、腰の二つの宝玉のついたベルト、サンライザー、そして何より目立つバッタの様な顔、まごうことなき仮面ライダーBLACK RXだ。

目線がいきなり1m近く高くなり手足も伸びて転びそうになるが何とか踏みとどまり走り続ける。

俺はガラガラランダに走り寄りながら腰のベルトサンライザーに手をやる。

するとベルトに光が集まりRXの必殺武器リボルケインが現れる。

俺はリボルケインを一気に引き抜くと少女に気をとられているガラランダの背中にかかけよった勢いのままにリボルケインを突き立てる。

ようやくこちらに気づいたのかガラランダは反撃しようとしてこちらに手を伸ばす。

しかしすでに俺がリボルケインから高エネルギーを注ぎ込み内部

から体を破壊していたガラガラランダの手は届くことはなかった。

ガラガラランダの体からリボルケインを引き抜き、ガラガラランダの爆発に撒きこまぬように人がいない方思い切りガラガラランダを投げ飛ばす。

投げ飛ばしたガラガラランダは地面に着く地同時に爆発して消えた。ガラガラランダの消滅を確認した俺は急ぎ変身をとき少女のもとに向かう。

少女のもとに行く俺が目にしたのは先ほどとは程遠いいたいたしい姿だった。真っ白だったワンピースは血と土埃で赤黒く汚れ綺麗なストレートヘアーが今はぼさぼさになっていた。だが最も変わったのは足だ。ガラガラランダの攻撃を受けたせいで両足共になくなってしまうっている。

絶え間なく流れ出る血に気づくとすぐに持っていたニューロリンカーやパソコンをつなぐ1m半ぐらいの長さがあるXSBゲイブルをポケットから取り出し半分に引きちぎると少女の足をきつく縛り止血した。

その後は救急車を呼び到着を待った。

救急車の到着前に少女は苦しそうにだが少し意識を取り戻した。

まだ朦朧とする少女の手おにぎり俺は必死に呼びかけた。もう俺の所為でこれ以上死んでほしくはなかったから。

「もうすぐ救急車が来るから頑張ってくれ、頼む、死なないでくれ」少女や他の人たちへの申し訳なきや自分のふがいなきに押しつぶされそう、これ以上背負いきれないと感じた俺はひたすら願った。

「生きてくれ、俺の為に生きてくれ、お願いだ。」

俺はひどいことを言っている、その自覚はあった。痛みを苦しんでいる少女に死んだら己の心の重荷になるから生きてほしいなんて本当にクズもいとところだ。だけど本当にもう如何しようもなくてそう言うしかなかった。

少女の手を握り助かるように願っていると少女のかすれて途切れがちな小さな声が聞こえた。

「な……まえ、お……し……えて」

病院を出て俺は当てもなく歩いていった。何も考えたくないのに頭の中では昨日の光景ばかりがプレイされ続けている。

人間いいことより悪い事の方が頭に残るのかもしれないな。だからこれ以上後悔しない為にも俺は戦おう。

この世界の悪意と。

そう俺が決意した瞬間ニューロリンカーからニュースの通知が来た。

俺はARで表示されている仮想デスクトップを操作しニュースを開いた。

「マジかよ。」

思わずそんな言葉が出るようなニュースだった。それは昨日に引き続き今日も怪人が出現して暴れていると言う物で。

「クソッ！　せつかく戦うって決めたばかりなのに遠すぎる。」

その場所は、公共交通機関しか移動の手段がない今の俺には遠すぎた。とても間に合わない。また大きな被害を出してしまう。

俺は一瞬また間に合わないのかと途方に暮れたが何もしなければ昨日以上の被害が出てしまうと思ひ直し、とりあえず駅に向かい走り出した。

そんな時、後ろから転生してからめつきり聞かなくなったエグゾーストノートの音が追いかけてきた。

振り向くとそこにはアクロバッターが自立走行してきていた。

俺に追いつくとアクロバッターは停車し「ノッテ、ライダー」と機械の合成音の様な声で俺に自分にのるように言った。

「俺が乗っていいのか？」

それはアクロバッターへの問いかけと言うよりは自分への問いかけだった。アクロバッターは仮面ライダーBLACKRXのパートナーだ、はたして俺に乗る資格があるのか分からなかった。

迷う俺にアクロバッターはまた「ノッテ、ライダー」と言う。

俺は仮面ライダーBLACKRXに変身してアクロバッターに乗った。

俺にアクロバッターに乗る資格があるのかは分からない、けどこ

ここで迷って時間を無駄にすれば俺はアクロバッターに乗る資格を、仮面ライダーになる資格を失うと思った。

だから俺はアクロバッターで怪人のもとへ急いだ。

仮面ライダーとなるために。

こうして俺は仮面ライダーBLACKRXとなった。

第三話 仲間

俺は有田秋霜、仮面ライダーBLACK RXをやっている。

怪人退治は大変だが俺には仲間がいる。

そう！ アクロバッターだ。

だがそれだけじゃない新たにロードセクターとライドロンが仲間に加わり一人と三台で何とか戦っている。

そして俺が初めて変身してから一年ぐらいたったある日、俺はあの少女が最初に運ばれた病院を訪れていた。

別に俺が怪我をしたわけじゃない。

ただあの日の事を忘れない為の習慣のようなものだ。

俺は自分で自分を罰し許されたいのだろう。

そのことがわかるから余計に自分の行動に嫌気がさす。

そんな習慣に終止符を打ち自分の罪と向き合うために何度もこれで最後にしようと思いいい聞かせるがまた来てしまう。

そんな繰り返しだ、今日もそうして病院を訪れ何もせず呆けていると一人の少年が話しかけてきた。

「こんにちは 僕は千明宗弥と言います。 病室からよくあなたを見かけて、何だか気になつて話しかけてしまいました。」

そのあまりにも子供とは思えぬ落ち着き具合と言葉使いからこいつも転生者かとも思いかけたが彼の邪気の無い笑顔は大人にできるようなものではないと感じ考え直した。

「何か用か？」

俺の不愛想な返事にも負けず宗弥は俺に友達になりたいと言ってきた。

「僕は生まれつき病弱で家と病院を行ったり来たりの日々で友達がいないんだ、だからもしよかったら僕の友達になってくれないかな。」
俺にはさっぱり分からなかった。

この年端もいかぬ少年がなぜ自分などと友達になりたいと言うのか、だからここで悩むのもしやくなので聞いてみた。

「なんで俺と友達になりたいんだ？」

すると宗谷は恥ずかしそうにこう答えた。

「君は良く病院に来ているからついでにたくさん僕の所にも遊びに来てくれそうだから。」

何と言う事もない年相応の短絡的発想だった。

どんな凄い理由が出てくるのかと身構えていたのが馬鹿らしくなった俺は思わず宗弥と友人になってもいいような気がしてしまった。

「有田秋霜だ。」

「えっ!？」

突然の名乗りに宗弥は如何いう意味なのかわかっていない様子だ

「名前だよ、な・ま・え、友達なら名前ぐらい知っとくべきだろ。」

「僕は千明宗弥です。」

「知ってるよ。」

嬉しそうに名乗る宗弥は先ほどの落ち着いた様子とはまるで違一年相応に見える。

宗弥はきつと色々なことを我慢してきたのだろう。

病弱だから仕方がない。

それはそうだろう、そんな事、誰に責任があるわけでもないのだから。

だから俺は宗弥に何かしてやりたくなかったのだ。

きつと俺は宗弥を憐れんでいるのだろうそれ自体はあまり良いことではないのだろう。

だかその感情からくる何かしてあげたいと言う思いはそう悪いものではないはずだ。

そんな風に自分自身に言い訳しないと何できない自分にあきれながら宗弥と一緒にゲームをやらないかと提案する

「宗弥、もしよかったらブレインバーストってゲームをニューロリッカーにインストールしないか？俺もやってるVRゲームなんだけど。」

俺は宗弥にブレインバーストを進めた。

ブレインバーストは俺をこの世界に送った奴がいつの間にか俺の

ニューロリンカーにインストールしたVR格闘ゲームだ。

奴の言った通りこのゲームは戦闘経験のなかった俺が仮面ライダーとして戦うための経験を積むにはうってつけだった。

それほどのリアリティがあるゲームだ。

あまり体を動かさないのであろう宗弥の入院生活おける慰めになるだろう。

宗弥はすぐに首を縦に振り肯定した。

「うん！ やってみたい。」

「ならさっそくインストールしよう。」

俺はいつも持っているXSBケーブルを取り出し、片方の端子を自分のニューロリンカーに指してもう一方の端子がついた方を宗弥にわたした。

宗弥は一も二もなくそれを自分のニューロリンカーに指した。

そのためらいの無さから宗弥の初めて友達ができた喜びの大きさがどれほどなのかが容易にわかる。

これはもう失敗する可能性があるとは言えないなど俺はインストールが成功することを祈りながら宗弥のニューロリンカーにブレインバーストをコピーインストールする。

しばらくすると宗弥が無事ブレインバーストをインストール出来たのか最初に出てくる言葉を読み上げる。

「加速世界へようこそ?」

宗弥が不思議そうに首をかしげている。

最初に出てくる言葉は正確にはWELCOME TO THE ACCERATED WORLDと出てくるのだが宗弥は普通に読んでいる様だった。

最近の小学生が凄いのか宗弥が凄いのか、まあ宗弥は育ちの良さを感じさせるし、恐らく後者なのだろう。

だがそんな事より無事にインストール出来たようで良かった。

「無事にインストール出来てよかったな。これで後は明日までグローバルネットに接続せずにいれば自動的にブレインバーストで使用するアバターができる。」

「そうなんだ、明日が待ち遠しいな。」

言葉通り明日が待ち遠しくそわそわしている宗弥に俺が今日とはと
りあえず帰ると伝えると悲しそうな表情を少しだけ見せるがやがて
取り繕った笑顔で送り出してくれた。

翌日、俺は小学校が終わってすぐ宗弥のもとへ向かった。

今の病院は昔の様にきつい漂白剤の様な匂いはせずかすかに芳香
剤の良いにおいがする。

昔の病院は殺菌や消毒にクレゾールや次亜塩素酸ナトリウムをつ
かっていたので独特のにおいがしていたなんて一部で言われていた
が、じゃあ今は如何しているのだろうかなどと、取り留めもないことを
考えながら宗弥の病室に向かって看護師さんについて歩いている。

この看護師さん、宗弥に俺が来ることを伝えられていたのか受付に
行き宗弥の病室を尋ねるとすぐに来て案内してくれた。

宗弥の病室に着くと俺は思わず案内してくれた看護師に礼を言う
のも忘れ本当に宗弥の病室なのか聞いてしまった。

だが看護師は不愉快な顔一つせず、ここが宗弥の部屋だと答えてく
れた。

もしかしたら驚く人が多いのかもしれないこの病院には似つかわ
しくない豪華な扉に。

案内を終えた看護師が戻っていくと俺はドアを恐る恐るノックし
た。

「秋霜だ。」

すると待つてましたとばかりにすぐにドアが開く。

「いらっしやい、さあ入って。」

そう言う宗弥の言葉か耳に入らないぐらいに部屋の豪華さに圧倒
されていた。

宗弥の部屋は病室とは思えないほど広くて絵画や花瓶などの豪華
な調度品、それにまるで高級ホテルにでもありそうな机とソファア、
ベッドも病院でよく見る簡素なものではなく綺麗な彫刻が施された
木製の大きなベッドだ。

だがその横にある医療器材が俺に冷や水を浴びせかけた。

此処はどれだけ豪華であろうとも宗弥を閉じ込める鳥かごなのだ。

俺は宗弥の促すまま部屋に入ると彼に夢を見たかを聞いた、どうやら普通にブレインバーストを始めると悪夢を見るようなのだ。

俺の時は見なかったので軽く考えていたが病弱な宗弥は大丈夫だろうかと今更ながらに心配になってきている。

「宗弥、昨日夢を見たか？」

すると宗弥はとても驚いていた。

「見たよ、飛び切りの悪夢だったけど、どうしてわかったの？」

「ブレインバーストがアバターを作る時に必ず悪夢を見るんだ。なぜだかは分からないけどそう言う仕様みたいなんだ。」

それを聞くと宗弥は一応、納得したようで落ち着きを取り戻す。

「悪夢について納得してくれたところで早速ブレインバーストについて説明したいんだがいいか？」

「わかったよ。とりあえずソファアに座って待ってて。」

そう言うとき宗弥は部屋の隅にある棚から二つコップを取り出して次に棚の下の冷蔵庫からジュールの瓶を取り出して俺が座ったソファアの対面にやってきてコップにジュースを注ぎもてなしてくれる。

だが俺は宗弥のもてなしに戦々恐々だ。何故なら用意されたそれらの物はすべて、過度な装飾を施した似非高級品ではなく、質素だがどこか洗練された優雅さを感じさせる本物の風格があったからだ。

だがここで怯んでは余にも宗弥に申し訳がない。

久しぶりの、ともすれば初めての友人の俺が気後れしていたのでは嫌な思い出を彼に残してしまうだろう。

だから俺はソファアに深く座り、見ようによつては不作法だったかも知れないほど何でも無い物を扱う様に無造作にコップを取る。

俺は宗弥に礼を言い、その後一口ジュースを口に含み喉を湿らせ、ブレインバーストについて話します。

「ブレインバーストについてなんだが色々オプションはついていて

がメインとしてはVR対戦格闘ゲームだ。取りあえず俺と直結して始めてみよう。」

俺は一旦コップを置き家から持ってきたいつも持っているものより長めのXSBケーブルを取り出し、片方の端子を自分のニューロリンカーに指してもう一方の端子がついた方を宗弥に差し出した。

宗弥がケーブルを接続すると俺は早速レクチャーを開始する。

「ブレインバーストはバーストリンクとコマンドを入力すれば起動する。普通に音声入力でも思考発声でも仮想デスクトップからの入力でも大丈夫だから試してみてください」

俺はそういうと自分も「バーストリンク」と意識を加速させる。俺に続き宗弥も加速できたようだ。

宗弥は俺と同じで仮想世界で使っているアバターは自分自身の姿のようで違いと言えば服装ぐらいのものなのですぐにわかった。

アバター体となった宗弥はきよきよとあたりを見回している。無理もない、ブレインバーストは思考を一千倍に加速する。

そのうえ、その間は通常ソーシャルカメラの情報から構成された、まるで色が抜け落ちた青いモノトーンの3D映像の世界を見ることになるのだが、今はそのソーシャルカメラすら無い場所にいるので、辺りは無機質な3Dポリゴンの床や壁、天井が広がっているだけだ、余計に混乱するだろう。

まあ流石に防犯のため全国津々浦々まで網羅しているソーシャルカメラとして個人の部屋のプライベート空間に近い病院の個室にまでは配置されていないから仕方がない。

というかICUなどならまだしも患者の安全などの為と理解できなくはないが、個室にまでカメラがあれば逆に怖い。

物珍しそうにあたりを見ている宗弥に今起こっていることを説明する。

きちんと伝わればいいが、まあ宗弥は同じ年頃の子供より頭がよきそうだから心配はいらないかもしれない。

一通り説明すると宗弥は此処が思考を1000倍に加速した世界だと理解してくれたようでソーシャルカメラカメラがあるところも

見てみたいなどと言いつつ出すぐらいだ。

だが今はメインの格闘ゲームとしての機能を説明する方が先だ。

「さて宗弥、いよいよここからがゲームの説明だ。視界の端にブレインバーストと言うアイコンができているだろう、それがブレインバーストのメニュー画面だ。そこから自分のステータスを視たり対戦相手を探したりできる。今回は対戦までやってみるか、マッチメイキングリストのボタンを押してみてください。」

宗弥は俺の言葉に従い自分の仮想デスクトップを捜査しているのだろう自分の前で指を動かして何かを押す動作をしている。

俺に宗弥の仮想デスクトップが見えるわけではないがよどみなく指が動いているところを見るにすぐに使い方は分かったようだ。

「リストが出たよ、このブラックサンというのが対戦相手？」

「そうだ、ちなみにそのブラックサンが俺だ。今はグローバルネットにつながずに直結しているから俺しか出ないがネットにつながると周囲のバーストリンカーがマッチングリストに現れる。バーストリンカーってのはブレインバーストのプレイヤの呼び名だ。それじゃあ、早速始めるか、リストにあるブラックサンを選択してデュエルと表示されるボタンを押してくれ。」

「いきなり対戦するの？ チュートリアルとか説明書とかないの？」

「実際に戦うのはまだ先だ。これがチュートリアルみたいなものだよ。」

俺がそう言うと宗弥がデュエルボタンを押したのだろう景色が味の無い3Dポリゴンから夕陽に照らされる短草原に切り替わりアバターもブレインバーストのデュエルアバターとなった。

俺の姿は黒い強化皮膚リプラスフォームに真赤な複眼マルチアイ、それに額から延びる2つの触覚のようなもの……仮面ライダーBLACK ACKそのものだ。

なぜRXではなくBLACK ACK、しかもブラックですらなくブラックサン、それはブレインバーストの名前のつけかたが色プラス何かという仕様だからなのかもしれないが俺は結構この姿は気に入っている。

ほぼ格闘戦しかできないが経験は詰めるから悪い事ばかりじゃない。

それに何故かブレインバーストの中でもアクロバッターがいるのだし、姿はバトルホッパーに戻って、最初それが分かったときは驚いたが今は、もうそう言うものだと言った。

まあ俺の事はおいておくとして宗弥のアバターは一体どんなものになったのだろうか。

彼がいた場所には頭部に王冠を被った美しいガラスの彫像があった。

それこそが彼のデュエルアバターなのだろう。

それを示すように体力バーの上の表示がガラスモナーク……硝子の王様となっている。

「グラスモナークか、かっこいい名前になったじゃないか？」

「そうだね、けど現実の僕と一緒にとてもひ弱そうだな。」

俺は宗弥のアバターを褒めたがあまりうれしくなさそうだな。

むろん宗弥のグラスモナークはガラスの頭部をもつ表情のないアバターなので顔色は分からないがその声色は十分に宗弥の心をあらわしていた。

宗弥の気持ちは分からないでもなかった。

そのアバターはすらすらとしたガラスの手足の美しい造形をしていたが高度な物理演算エンジンを積んでいるブレインバーストではそのガラスの体は容易に砕かれてしまうだろう。

しかしブレインバーストにおいてそんなことは大した問題ではない、だがそれをそのまま言えばきつと宗弥は傷つくだろう事は容易にわかった。

だから俺はこう言いかけた。

「心配することはない。ブレインバーストでは同レベルは同スペック、欠点があるならその分長所がある。それにブレインバーストは対戦ゲームだけど対戦以外の楽しみがあるんだよ。レベル4以上に成れば無制限中立フィールドという現実の世界と重なる様にできている広大なオープンワールドのステージにいけるんだ、しか

もそこでは通常対戦が現実の1.8秒、体感の時間で30分しか加速してられないのに対しリンクアウトするまでずっと加速していられるんだ。そこでは色んな人に出会えようし、色んなものが見える。何日もかけて広大な世界を冒険だってできるかもしれない。」

俺の言葉に宗弥も大分興味を取り戻したようでしきりに相づちを打つ。

「だけど気を付けないといけないことがある、それはバーストポイントの事だ。メニュー画面を見てくれバーストポイントは最初、100ポイントあるんだけど減っていないか？」

「確かに減っている99ポイントになっている。」

「このゲームでは加速するためにポイントが必要なんだ、さっき話した無制限中立フィールドに行くにもね。あとレベルアップや無制限中立フィールドでアイテムを買ったりするにもポイントがいる。」

真剣に聞いてくれる宗弥に俺は楽しくなりついもったいぶった喋り方になる。

「じゃあそのポイントはどうやって稼ぐのか、それはやっぱり対戦だ。対戦に勝つとポイントをもらえて、負けると奪われる。このほかにも無制限中立フィールドでエネミーと呼ばれるモンスターを狩る方法もあるけど基本はやっぱり対戦だ。あとポイントをすべて失うとブレインバーストが強制アンインストールされてブレインバーストの記憶が消えるなんてうわさも聞くから気を付けるようにな。」

その後も俺は対戦時間いっぱいまで宗弥にブレインバーストについて知りえる事すべてを語って聞かせた。

体感時間で30分経つころにはすべて話し終えてドロイーで対戦が終わった。

現実の世界に戻った俺はソファァーから立ち上がり宗弥に挨拶をして帰る。

「話さないといけないことは全部話したし、そろそろ帰るよ。ジューズありがと、おいしかったよ。」

俺がドアを開け廊下に出ようと言うとき宗弥から声をかけられる。

きながら二人の事をやはりそう呼んだ。

「今日お越しいただけなんて思いませんでした。」

宗弥の喋り方は何だか硬かったがその声からは喜びにあふれていた。

やはり家族が見舞いに来てくれて嬉しいのだろう。

「仕事の合間によって見たのだ。横になっっていなくて大丈夫なのか？」

宗弥の祖父はまるでまぶしい物を見る様に目を細め笑っている。

宗弥のことがかわいくて仕方がないのだろう。

「はい。今日はなんだか調子がいいので。」

宗弥はそう答えるがやはり家族にとっては心配には違いないのか今度は彼の父が「そうか、だが無理はするんじゃないぞ。」と宗弥を言い含めている。

「ところで、ソファアの彼は友達かい？」

今度は俺の方に話が来たようだ、そう言えばソファアに座ったままで礼を失したかもしれない。

だがそんな俺を宗弥はためらいなく友人だと肯定した。

「はい、僕の友達です。」

俺はソファアから立ち上がり宗弥の祖父と父に挨拶をする。

「はじめまして、有田秋霜と言います。お邪魔しています。」

挨拶を終えると俺はこれ以上家族のお見舞いを邪魔するのも無粋だと思ひ宗弥の所まで行き「今日はもう帰るよ」と伝える。

「今日はこれで失礼します。」

宗弥の祖父と父に挨拶をして宗弥の病室を出ようとする時宗弥の祖父から「また来てやってくれ」と声をかけられたのもう一度お辞儀をして病室を出る。

宗弥の病室をでて帰るために病院のエントランスまで降りると大きなテレビスクリーンでニュースが流れていた。

連続無差別射殺事件が発生中で外出時は気を付ける様にと注意喚起をしている。

ニュースによると被害者は全員直上より針の様なもので射貫かれています。

恐らくこれも悪意の結晶体なのだろうが空を飛ぶ怪人で針を武器とすると言う事はグロンギのメ・バヂス・バかもしれない。

これは早く止めなければ大変なことになる。

俺個人の印象として悪意の結晶体として現れる怪人は俺の記憶が核となるからなのかあまり頭が良くない。

だがその分狂暴だったり、残忍だったり、嗜虐的だったりする。

むろん怪人は元々そう言う傾向が往々にしてあるがそれが強化されている感じだ。

今回の怪人がメ・バヂス・バとするなら打ち出す針が再生し次第手当たり次第に殺して行っている感じだ。

「ぐずぐずしている暇はないな。」

俺はすぐにメ・バヂス・バの犯行現場に向かう事にした。

メ・バヂス・バ自体はもういないかもしれないが何か手がかりが見つかるともしれない。

近い場所で犯行を繰り返さないとも限らない。

急ぎ事件現場に来ては見たが現場はまだ警察に封鎖されていて見る事も出来なかった。

それにこれはある意味良かったが次に被害者はまだ出ていないようだ。

此処にとどまっても警察が帰るのはまだまだ先の様だし地道に空を見上げて探すしかないようだ。

決めたからには見つけ出し倒すまで帰らないぐらいの覚悟で目を皿にして空を探しまわった。

そして俺は何時間も探しまわったあとに大変なことに気づいた。

それはメ・バヂス・バが空にいるとは限らないってことだ。

グロンギには人間態がありその姿で人に紛れられればかなり見つけるのが困難になる。

もしかしたら今までにすれ違った者の中にいたのかもしれない、これはもう一度探し直しだな。

そうして俺が事件現場に戻ろうと歩いていたとき一台の車が近づいてきた。

黒いセダンタイプの高級車だ。

知り合いにそんなものに乗っている人はいないし誰だろうと考えていると、窓が下がっていき中の人物が見えた。

宗弥の祖父と父だった。

「有田君だったね。もう日が暮れるから家に帰りなさい。もし遠いなら送るよ。」

今までの人生の苦労を顔に刻み付けた様な迫力のある祖父と違い、宗弥と同じで温和そうなほんわかした雰囲気、宗弥の父が俺を氣遣ってくれるがそんなわけにもいかない俺は返答に窮してしまう。

そんな俺を見て宗弥の父は車のドアを開け出てこようとしていた。その時ふいに鋭い風切り音がした。

次に鋭いものが金属を貫くような音がしたと思ったら宗弥の家の車の運転手らしき人がぐったりとしていた。

俺は瞬間的にメ・バヂス・バの仕業だと理解し空を見上げる。

すると何かが急降下している姿が見えた。

車のボンネットの上に着地したそれは動かぬ運転手を見て満足そうに首を縦に振る。

その姿は見るものに嫌悪感を与える事は間違いないだろう。

そいつは蜂の様な顔に昆虫の羽、そして何より多くの命を奪ってきたであろう腕の針の射出口を持っていて、そのすべてはメ・バヂス・バの特徴と一致していた。

間違いなくメ・バヂス・バだ。

「早く逃げて!!」

俺は宗弥の祖父と父に逃げる様に言ったが2人は車からは出たが逃げようとしなかった。

2人は俺を見ていた。

なるほど俺を置いては逃げられないと言う事か。

2人とも大した人物なのは分かった。

命の危機がある極限状態でも人の事を思い行動できるのは素晴らしいが今は先に逃げてほしかった。

俺が逃げれば2人も逃げ始められるだろうが俺が逃げたあと二人がメ・バチス・バから逃げられるとは思えない。

それにここでメ・バチス・バを逃がせばまた犠牲者が出る。

そんな事は断じて許されない。

もう目の前で1人殺されているんだ。

俺は覚悟を決めた。

此処で変身して戦う。

正体が宗弥の祖父や父にばれて宗弥に近づくなと言われるかもしれないが、まあ仕方ない。

普通の人には俺も怪人も大差ない。

それにもともと潮時だった。

俺の傍にいてあいつを危険に巻き込むようなことはできないし丁度いい。

宗弥の父が俺の手を取り逃げようと手を伸ばすが俺はその手を躲しメ・バチス・バの前に躍り出る。

「宗弥のお爺さん！ お父さん！ 2人は逃げてください。こいつは俺が倒します」

そう叫ぶと俺は変身ポーズをとる。

「変身!!」

RXに変身した俺をみて2人は言葉を失っている様だがメ・バチス・バは横に開くあごを鳴らしながら車のボンネットから飛び降り襲ってきた。

メ・バチス・バは針を使ったばかりでまだ針が再生していないのだろう接近戦を挑んできた。

しかし元々接近戦を得意としないメ・バチス・バの大雑把な攻撃をよくけるのはまだまだ戦闘経験の足りない俺でも容易であった。

「RXパンチッ!!」

両手をあげ飛びかかってくるメ・バチス・バに俺はカウンターで強

烈なパンチをくらわせた。

後方に吹き飛びアスファルトを削りながら転がるうちに流石に接近戦では勝ち目がないと理解したのかメ・バヂス・バは背中羽を広げ空に逃げる。

羽が起こした風を感じながら俺は飛んでいくメ・バヂス・バを見上げる。

悔しいが俺には羽がない、だから当然、飛ぶことができない……だが奴を倒す方法がないわけじゃない!!

「変身!!」

俺はRXからさらにロボライダーに変身した。

メタリックな黒とオレンジの装甲、名前の通りロボットの様な姿のロボライダーは凄い力を秘めたライダーだ。

その主武装は光線銃、ボルテックシューター。

俺はその名を呼び、実体化した銃を空のメ・バヂス・バに向ける。

「ボルテックシューター!!」

そしてありつたけの思いを乗せて引き金を引く。

「もうこれ以上、誰かを殺させはしない!!」

俺は思わず叫んでいた。

ボルテックシューターから放たれた光弾は俺の叫びと共にまっすぐ空へと上がっていく。

そして光弾はメ・バヂス・バの背中に命中し胸へと抜けていった。間もなく光弾は空に消えゆき、メ・バヂス・バも爆散し塵と消えた。しかし遅かった、またたくさん命が失われた。

奴を倒しても喜びなんて微塵もわいてこない、後悔ばかりが先に立つ。

車の方に目をやると、メ・バヂス・バがボンネットに着地した衝撃で壊れたフロントガラスか亡くなった運転手の姿が覗く。

その姿はまるで俺に「なんでもっと早くメ・バヂス・バを倒さなかったんだ。」と語りかけてくるようで、俺は彼から目を背ける。

そんな俺に背後から近づくと足音がする。

本当に胆の据わった人たちだ。

り、学校などのやらなくてはいけないことを終えたとアクロバッターたちが隠れている廃工場に行き、怪人による事件が起きていないかグローバルネットに接続してニュースを隅から隅まであさるのが日常となっていた。

そんなある日、俺以外には誰も来ないはずの廃工場の扉を開ける音がした。

俺は思わず身構えるがやって来たのは見知った人物だった。

「なんとも、すさんだ場所に隠れているものじゃな。」

宗弥の祖父がそんなことを言ってくるが俺はなぜ彼がこんな場所にいるのか……いや、言葉から俺に用があるのは分かっているが目的が分からず、混乱してしまう。

俺は近くにいたアクロバッターの頭のあたりを撫でて落ち着いてから宗弥の祖父に訪問の理由を聞いた。

「なぜ、こんな所まで来られたんですか?」

すると宗弥の祖父は俺の正面まで来て片膝をつく。

子供の俺との身長差ではそうしなければ目を合わせられないからだろうが、あまりきれいと言えないこんな場所で高級そうな着物を汚してまで目を合わせて話さないといけないことって何なんだ。

「おぬしに提案があつてきた。 俺におぬしの怪人退治の手助けを

させてもらいたい。」

これには俺も驚かされた。

この人も変身して戦えると言うのか?

「むろん俺は君の様に変身して戦う事は出来ん。 だがこう見えても俺は顔が広い、警察などに怪人の情報を問い合わせる事も出来る。 他にも此処よりは良い隠れ家を用意できる。」

なるほどそれならば納得いく話だがやはり断った方がいいな。

関係の無い人を巻き込むわけにはいかない。

俺が断りを言おうとするとそんな事はお見通しだったのか宗弥の祖父は言葉を重ねる。

「おぬしがなぜ戦うのかわしには知りようもないが、あれが悪意の固まりと言うのならあれば君一人で背負っていいものではない。

儂にも共に背負わせてくれ。」

俺は今どうすればいいか迷っていた彼の言葉は俺の心に案外簡単に入ってきた。

それは彼の年の功なのか元から持つカリスマ性からなのかは分からないがとにかく俺の心を揺らす。

確かに彼に協力してもらえれば情報を集めるのは楽になるかもしれない。

「それにの、これはおぬしの為だけに言っているのではない、力を合わせる事で今までなら犠牲になってしまうような人たちを救えるかもしれないのだ。」

このとき俺の心は決まった。

助けられる命が増えるのならそれに勝ることはないはずだ。

「よろしくお願いします。」

そう言っただけで差し出した俺の小さな手を宗弥の祖父は取る。

「ごちらこそ、よろしく頼む。そう言えば自己紹介をしていなかったな、わしは宗弥の祖父で千明宗重郎じゃ。」

そう言っただけで握られた手から彼の手の熱いぐらいのぬくもりが感じられる。

もしかしたらずっときつく拳を握りしめていたのかもしれない。

そうかこの人も、きつと色んな葛藤がある中で決めたことなんだ。

普通の常識を持っていて、怪人に襲われても先に子供を逃がそうとするような人だ。

いくら特別な力を持っていても子供の姿の俺が闘うのをなんとも思わず容認できるわけがないんだ。

それなのにこの人は決断したんだ。

きつと苦しいはずだ、それでも自分が考えた最善と思える道を進んでいく。

凄いな。

俺がそんなことを考えている時、宗重郎さんが思い出したように宗弥の事を口に出す。

「そう言えは宗弥がおぬしは最近遊びに来てくれないと寂しがって

いたぞ。」

「いいんですか？宗弥と友人でいて？」

俺がそう聞くと宗重郎さんは快活に笑う。

「孫の友人を選別しようとするほど、わしはまだ耄碌しとらんよ。」
俺はそれを聞いて感謝した。

「ありがとうございます。」

そのあと宗重郎さんは立ち上がり俺に「ではそろそろ行くとするか。」と言うと俺を連れ歩き出した。

「どこにですか？」

俺がそう聞くと宗重郎さんは「新しい秘密基地じゃよ、まあまだ仮のじゃが。」と言う。

こうして俺は新たに手助けをしてくれる仲間ができたのだった。